
龍の灯火

森 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の灯火

【Nコード】

N0945B

【作者名】

森 翼

【あらすじ】

世界には人間が住む人間界と、龍神と龍が住む龍界と、魔神と悪魔が住む魔界がある。人間だけはこの事実を知らない。龍界の皇子シャウトと皇女ハスナは人間界に行き、龍神として成長するようにと言われ人間界に行き、さまざまな出来事にあい日々成長していく。皇子皇女にぶつかる困難とは！？戦いの中で学ぶものは！？

プロローグ：遠い夢

龍神頂フラウは最後の攻撃を開始する。

「破滅と崩壊の狂想曲。」

静かに暗い音が辺りに響く。龍神頂フラウと、敵対している魔神の体内からエネルギーが生まれる。そしてそれは激しい爆発を起こす。フラウ自身も死ぬ直前だが、この戦いに勝利した。

「頭革ウォルス、無敵独兵ラファールよ今まで共に戦ってくれた事に感謝する。そしてウォルスよ、これからは頭革でなく龍神王と名乗り私に変わって龍界を治めてくれ。私はもうじき死ぬがウォルスと龍妃のもうじき生まれる子に私の力を封印しておく。余談はもうできないな…ではさらばだ龍神王、無敵独兵、六精霊今まで…。」
声は途絶え、龍神頂は消えてしまった。

昔の事を夢で見て、ウォルスは目覚めた。

「もう二度と戻らない我が友フラウよ…私は…、いや弱音は吐くな。そうと言っただろ、フラウ。」

昔を思い出しウォルスは笑う。

「でもおまえがいないと明日への一歩がづらいな。」
そして龍神王はゆっくりと起き上がる。

1 銀の煌めき

「シャウト様、どこですか？」

男の声がする。この男は短い金髪に長身、そして、背中に夢幻槍という槍を持っているという外見をしている。結構美男子系である。

「ライズ、なんか用？」

シャウトと呼ばれた男の子が答える。長めの銀髪に中背、こちらもカッコいいと言われるような容姿をしている

「龍神王様が呼んでいます。」

「ふーん。わかった。」

「ならば急いで下さい。」

「わかったから、でも変な敬語使うなよ。」

「召使いの私がそんな事できませんよ。」

「召使いだなんて思っていないよ。金の輝きライズさん。」

「銀の煌めき様には、かないませんよ。」

「ったく…で父上は何の用事？」

「それは行けばわかります。」

「…そうか。じゃあさっさと行くか。」

そういつてシャウトは王室にむかって走って行った。そこは空に浮いている、王城なのだ。

シャウトが走り去ると金の輝き…この龍界や魔界では強力な力をもつ一部の龍神や魔神には『仮称』という通称の呼び名、あだ名みたいなものがつけられるのだ。…は、別室にいるシャウト皇子と二歳差の妹である、ハスナ皇女を呼びに行く。

「ハスナ様、龍神王様が呼んでいます。」

「わかりました。」

ハスナと呼ばれた女の子は、赤髪で背は低く細い体つきをしている。仮称は血の裁者。そんなハスナを見てライズはシャウトよりもしっかりしていて楽だと思っている。

「では行きましょう。」
「そうしましょう。」

王室ではシャウトと龍神王ウォルスが談話していた。

「シャウトはもう精波を使いこなせるのか？」

精波とは精神力（メンタルの強さではなくる心の体力みたいなもの）のエネルギーを使い、普通にはない現象を起こしたり、姿などを構築したりするものである。それを使いこなせるのは龍神や魔神と悪魔とその他（龍や人間）に少しいるかいなかぐらいだ。

「当たり前じゃん」

「ならいい。これから日々の鍛練を怠らないように。」

「わかつ」

声を割って、ハスナとライズが王室に入り、いきなり叫んだ。

「悪魔と龍が真下で争っています。」

「龍神王様、どのようにいたしますか？」

龍神王は少し考えてからシャウトに、

「鍛練の成果を見せてもらおう。」

と言い、外に向かった。

「見てろよ、銀の煌めきの強さを。」

先に行ってしまったウォルスにそう言いながら、外に向かった。

龍が火を吹く。悪魔が精波を使う。

「俺の名は銀の煌めきシャウトだ。悪魔よ、かかって来い。」

そう言い放ち、手に光沢のある鋭い大剣『龍の頂』（りゅうのいただき）を出現させる。ライズも必要な時だけ夢幻槍を出現させばいいのと思いつつ、剣を振るう。悪魔の数を普通の剣撃のみで20匹いたのを残り1匹までに減らして、父親へと宣言する。

「これが俺の必殺剣、銀の牙、いくぞ。」

龍の頂が銀に光る。そして、それを振り下ろすと同時に銀色の波動が一直線にのびて悪魔を一瞬で消した。

金の輝きはそれを見て思う。

「正直ここまで強いとは思わなかった。これなら私は誓いを…。」
そこまで考えてそして自分からその考えを捨てた。

「なかなかの戦いだった。これをさらに磨き将来は立派に国を治める事ができるように努力をなさい。」

王室にもどった14歳のシャウトは20歳からは不老の龍神の父親と話してた。

「はいはい。」

「それは置いておき、シャウト、ハスナ、これから人間界に行ってもらおう事にした。ライズを連れてだが。人間の中学校という集団教育所で龍神としての器を大きくしてもらいたい。」

「わかりました。」

即座に答えるハスナ。

「でもさあ…」

シャウトは問う。

「楽しいの？」

そこにライズが補足する。

「以外に楽しいと思います。」

「なら行く。」

と、こんなかたちで話は終わり、人間界について学んだ半年後、シャウト、ハスナ、ライズは中1として、日本という国の千葉県の学校へ入学したのだった。もちろん人化（精波のうちの一つ）して髪を黒くして。（他は変わらないが…）

学校

千葉県のある学校で、入学式が行われた。シャウトとハスナは双子としてライズは一人暮らしの人という設定で入学した。名前は、シヤウトが、結城^{ゆうき}有^{あり}、ハスナが、結城^{ゆうき}叶^{かなえ}、ライズが、守野^{もりの}光^{ひかる}、とした。これは適当に考えたものである。

入学式を終えるとやたらルックスのいい3人には人がよってくる。ライズは人間界にも龍神や魔神もいるから（もつとも人間の気配とはかなり違うけれど）気をつけて下さい、と、言っただがまるで聞かない。まあ楽しんでくれればいいとも思っているようだが…。

「結城君ー、アドレス教えてー。」

「結城さーん、今度遊ぼうよ。」

人気だなあと思っている守野光ことライズにも人はやって来た。

「守野君は背高いね。カッコいい。」

「ありがとうございます。」

こんな時でも丁寧に答えて質問攻めを終えた後やっと帰宅。

「学校はどうですか？」

ライズが聞く。

「うん、楽しいね。」

「疲れますね。」

双方真逆な答え。

「でも、気をつけて下さい。なんか気配に違和感を感じるの、とても小さなものですけど。」

ライズは念をおして言い聞かせた。

それから一週間が過ぎ、学校生活にも慣れて、3人は自由に行動するようになった。なのでライズは以前人間界に来た時にやっていたバスケットボールという、スポーツの部活をやる事にした。なのでシャウトもハスナもバスケットボールをやる事にしたのだ。

「よお、有！」

「早く部活行こう！」

この二人は男子バスケット部の井場 悠斗とマネージャーの高川 咲である。

「了解！」

シャウトは社会的なのですぐに友達ができた。でも少し鈍いので、咲がシャウトに惚れているのには気付かなかった。

一方ハスナは内気で生真面目なため、いつもライズと一緒にいる。まあシャウトと一緒にいる井場と高川とは少し仲はよかったが。

シャウトは楽しみながらハスナは不満ながらに日々は過ぎていった。

そんな春の休日にライズは魔神の気配を感じた。

「御二方、強大な魔神が人間界のこの近くにやって来ました。撃退に参りますので準備して下さい。あと人化をといて（人化は力になり制御するものである。）30分後にドルドームを使うので（人間以外のものがその空間へ入ると異空間に強制送還される。）覚悟をして下さい。」

「オツケー。」

「わかりました。」

そして三人は戦地に向かう。

そこでおこる事も知らずに…。

不思議少女

30分後、魔神もこちらの気配に気付き向かって来る。

「今回の相手は今まで戦った事のある弱い悪魔や弱い魔神でもない、仮称がつく強い魔神です。油断せずにいきましょう。それではいきます、ドルドーム。」

ライズが注意を言い、精波『ドルドーム』を使う。そして異空間へとやってきた。

そこはなにもない暗い場所だった。そこには龍神三人と魔神が一人。その魔神は黒い長髪に鋭い目付きの怖い形相の人間に見えた。ライズが口をひらく。

「おまえは『漆黒の隠者』か。」

「そちらは金の輝きと銀の煌めきに血の裁者の3人がかりか。」

「出会ってすぐにで残念ですけどさようなら。」

ハスナがつぶやくと戦いが始まった。

漆黒の隠者が黒炎弾を放つ。しかし宝剣龍の頂の地面にさすと防御の結果が発動するという特殊能力で難無くしのぐ。そしてライズの夢幻槍の特殊能力である先端に触れた箇所は精波のエネルギーを倍にしてつたえるというものを使い漆黒の隠者を焼く。

「なかなかやるな。」

漆黒の隠者が苦し紛れに言った瞬間ハスナは精波を使っていた。

「火魔創天球」

とだけいつもの無愛想な声でつぶやくと、漆黒の隠者のまわりに火球が無数に現れ次の瞬間漆黒の隠者はもうその場にいなかった。

「口ほどにもない。」

と、ハスナ。

「俺なんもしてないよ。」

と、残念がるシャウト。

「それはみんなが成長してる証ですね。」
と、ライズ。

軽い話を終えてドルドームを解除しようとしたとき、かすかな龍神の気配と共に、少女が入って来た。

「ここは…どこなの？」

自分がドルドーム内にいるという認識がないようだ。

「何故高川がいるの？」

静寂の中最初に口を開いたのはハスナだった。

「そもそもここはどこなの？」

入って来た少女、『高川咲』が言う。

そしてここからはライズと高川の話が始まる。

「あなたは龍神ですか？」

「龍神って何？」

「じゃあ質問を変えます。あなたの両親は？」

「龍神ってなんなの？多分違うと思うけど。」

「では名前は？」

「高川と人と奈美。守野君、もうそろそろ教えてよ。」

守野と呼ばれた男、ライズは少し考え込み、突然と言う。

「高川と人…、そうか紅蓮の剛翼か…。あいつ人間と結婚したのか。」

「紅蓮の剛翼？」

少し間をおき、また話し始める。

「世界には人間が住む人間界、龍神と龍が住む龍界、魔神と悪魔が住む魔界があります。私達は龍界に住む龍神です。龍神と魔神はいつも対立し、時には人間界で戦う事もあります。その時に精波という人間界の言葉でいう魔法みたいなもので、このドルドームというのを発動し、龍界と魔界に住むものが入ると異空間に強制送還されるようにします。あなたはドルドームの範囲内に入って来たのでこ

ここにいるわけです。何故ここに來たかという、あなたの父親が龍神で、その血をひいてるからです。そして、紅蓮の剛翼というのは、龍神や魔神のうち強大な力をもつ物には仮称というあだ名みたいなものがつく。それであなたの父親は紅蓮の剛翼と名乗っています。もともと人間界では高川と人と名乗っているようですが。」

「うーん…少しは理解したけど、お父さん最近帰って来ないんだよね。どっかの魔神を退治してるの？」

「ところがこちらでも行方不明になっています。故に龍妃様の探索も含めて一緒に捜しています。」

「龍妃って？」

その質問に簡潔に答えようとする。

「あの二人、結城兄妹のは…」

そこで、今まで黙っていた結城有という事になっている少年が、火球を話している龍神に当てた。

「おい、余計な事をしゃべるなよ。」

「同感。」

怒りを含ませた少年の声に妹も短く乗じる。

「すみません。」

何事もなかったかのように答える守野の隣で高川咲は少しビビる。

「この事は誰にも喋っちゃだめだよ。」

「有君がいうならそうします。」

「うん。ありがとう。」

少年の明るい笑顔を見てかるく顔を赤くして答える。

「どういたしまして。」

そのタイミングで、

「ではドルドームを解除します。」

と、ライズが言い、各自家へと帰って行った。

炎精靈

3人は家で会議する。

「高川をどうなさいますか？」

「べつにどうもしない。」

さつと答えるシャウト。そこに、

「でも、これからはドルドームを使うと異空間に入ってきて来るのではないですか？」

「俺が守るよ。」

ハスナの疑問にシャウトが即答する。

「なら御自由に。」

と、ハスナ。

「…」

ライズは沈黙を守り、会議は終了した。

次の日。シャウトは咲に話し掛ける。

「これから戦う時にドルドームを使うと咲が入ってしまうのはわかったよね。だから、これからは俺が咲を守ってあげるから安心して。」

「」

相変わらずシャウトは、いつも通り笑顔。

「有君ありがとう。」

「うん。でも自分でも気をつけてね。」

「わかりました。」

その後、学校から帰る時に、シャウトは咲と一緒に帰った。

「有君の仮称はなんていうの？」

平然と咲は聞く。

「銀の煌めきっていう仮称だよ。」

「カッコイイね。あつ、そつだ。守ってくれる御礼するから今日うちに寄つてよ。」

有の事を好きになつてしまった（不幸にも）少女は必死だった。

「御礼なんていいよ。」

「ダメ、ちゃんと家に来てよ。」

顔を赤らめて、うつむきながら言う。

「じゃあ行かせてもらつよ。」

そして家に着く。

「今から晩御飯作るから、それを食べていつてね。」

「うん。ありがとう。」

「じゃあその部屋で待つてて。」

「わかりました。」

そして作る途中。

「有君はなんで人間界に来たの？」

「龍神として立派になるためだよ。」

「そつなんだ。」

「でも、まだまだ未熟だけどね。」

「私は懂れるけどね。」

「咲も龍神の血をひいてるからなれるよ。」

唐突な言葉に驚く。

「そつかな？」

有は静かに喋り出す。

「どんな生き物でも不可能なんて無いんだよ。可能にするには強く

望み、努力する事が大切なんだよ。」

「そつだよね。」そして、少し間をおいて

「御飯できたよ。」

その頃ハスナとライズは家にいた。それと龍もそこにいた。

「ハスナ様、炎精霊様からの伝言です。『この戦いには、ハスナの力が必要だ。是非、俺と共に戦ってくれ。』だそうです。どうなさいますか？」

少し考えた後ため息をつきながら、ハスナは龍に伝言を伝える。

「あのロリコン男に伝えて下さい。わかりました、用意をしたらすぐに行きます。変な気は起こさないようにして下さい。と、伝えて下さい。」

「かしこまりました。」

そう言い龍は飛び去って行った。

「ハスナ様も大変ですね。炎精霊はしつこいですからね。」

「まったくです。少しはライズの態度を見習ってほしいですね。」

喋りながら短い、したくを終え、

「では、行ってきます。」

「健闘を祈ります。」

龍界へと向かった。

その頃高川宅では、

「・・・だからお母さんもなかなか家に帰らないんですよ。」

「大変だね。」

「どうやら、母親の話らしい。」

「でも泣いたらいけないんです。」

少し震えながら有へと話し続ける。

「有君、この悲しさどうすればいいの？泣いたらいけないって分かっているけど、」

「うん。」

「考えると、涙が止まらなくなつて・・・」

「そう、」

「また、…泣いてしまうの。」

「そういい、有に泣きながら抱き付いた。それを返さず、

「…思い切り泣けばいいよ。たまには心を涙で洗わないと、とくに女の子はね。」

と、優しくささやき、少女を支えた。そして、

「俺の母親は今行方不明で、何処にいるかわからない。だから君の気持ちはわかるよ。だから相談はこれから聞くよ。」

と、言い、そのまま10分が過ぎ、なにも言わずに有は帰った。

「炎精霊、何用ですか？」

「ああ、来てくれたのか、私の愛しいハスナ。」

「気持ち悪い言い方は止めて下さい。それにあなたではありませんせん。」

とだけ、言葉を返して黙りこむ。

「そうかそうか。ライズのものだと言いたいのか。」

炎精霊はからかうように言う。少女は少し顔を赤くして、

「違います。」

とだけ言った。

「顔を赤くしてるのもかわいらしいよ。」

「・・・」

炎精霊のその言葉に少女はなにも返さなかった。

水精霊

シャウトが家に帰るとハスナはもう出掛けて、ライズだけがいた。

「もう気付きましたか？」

不意にそういう。

「もちろんだよ。」

「今回はとても大きな気配です。」

「わかってる。ところでハスナは？」

「炎精霊の所に行きました。」

「またか…。大事な時にあの炎精霊は…。」

「しかたないです。」

「でも今回は難しい戦いになりそうだね。」

「そのようです。」

今回の戦いは、今まで以上に苦しいものと知らずに…

「じゃあ行くか。」

「同意。…ドルドーム。」

ドルドームの少し前。

「ついにこの時が来てしまったか。戦いたくはないが…、龍妃様のため、己の立てた忠誠のため、やらなければいけない、なんとしても。」

紅蓮の剛翼は自分自身に語りかけた。

龍界にて、

「では今から、悪魔の撲滅に行くのですね？」

「そうだよ、ハスナ。」

「では、早く用事を済ませましょう。」

「そう言うなって、二人の時間を過ごそうじゃないか。」

「遠慮しておきます。」

「もし金の輝きの野郎だったらどうした？」

「ライズはそんな事は言いません。」

「ふっ、そうかよ。」

「そうです。」

千葉県全体にドルドームが形成され、なにもない異空間には4つの影があった。シャウトとライズと、隅でひっそりとしている高川、そして…

「俺は紅蓮の剛翼だ。龍妃様の命令により、皇子を受け取りに来た。銀の煌めき、来てもらうぞ、力づくでも。」

紅蓮の剛翼と名乗る赤と橙の混ざった髪をした、すらりとした長身の、ハンサムと言えるくらいの男は言った。

「何故ですか。」

シャウトが尋ねる。

「それは…言えない。さあ早く来るんだ。」

「そうはさせません。」

「おまえには言ってない。おまえは何者だ？」

「金の輝きライズと言います。」

「そうか。でも皇子が来ないなら力づくでいかせてもらっ。」

そう言うのと、紅蓮の剛翼は、10の巨大な火球をライズへと放つ。ライズはそれを防御の精波で防ぐ。そこにすかさずシャウトは、銀の牙を放つが、簡単に防御される。さらにライズが金光という光線を放つがそれもたやすく防御される。

「その程度か。こちらからもそろそろいかせてもらうぞ。」

そういうと、紅蓮の剛翼は手から炎を出し、ライズとシャウトへと浴びせる。シャウトは龍の頂の効果と、防御の精波を重ねてなんとかねばるが、ライズは精波だけでは支えきれず、全身を炎で焼かれる。

「うわぁー、あつ、うつ、ぐはつ。」

叫び声が響きライズはその場に倒れた。

そして、紅蓮の剛翼はシャウトへと、目をやり、それから紅蓮というのに相応しい炎を放った。

シャウトはそれを防ぎきれずまともにくらった。そして、その場に倒れたのだった。

「銀の煌めき、ついて来てもらうぞ。」

紅蓮の剛翼は、そう言っただけで歩をすすめていく。

「そうはさせない、ぐはつ。」

紅蓮の剛翼は、抵抗しようとするライズに、炎を浴びせ、黙らせる。もう終わりというその瞬間、陰にいた高川が叫んだ。

「やめて。」

「…咲か。でも俺はおまえの望みを叶える事は出来ない。邪魔はしないでくれ。」

「やだ。」

しかし非力な少女は父親の精波により、身動きを封じられる。

「や…め…て…。」

「すまない。」

次こそ本当の終わりと思った時、なんと、

「こんな雑魚も一人で片付けられないのですか？六精霊なのに。」

「楽勝だよ。でも、ハスナに会う口実を作っただけだよ。」

自身の炎により、悪魔を焼き尽くした炎精霊は、ハスナへと近づく。

「変な事言わないで下さい。それにもう少し離れて下さい。」

「はいはい。わかりましたよ、お嬢様。」

「…」

沈黙で言葉を返し、

「そろそろ帰らせてもらいます。」

とだけ言い、ゆっくりと、歩をすすめた。

「俺が本気だつてわかつてるのにハスナは…。」

六精霊たる炎精霊はハスナが過ぎていくのを見ながらつぶやいた。

それは青く長い髪をした男の龍神だった。目付きが鋭く、睨んでいるように見える。

そんな龍神をドルドームに迎えた一同のうち、最初に傷だらけでボロボロのライズが口を開いた。

「貴様、水精霊か。」

「久しぶりだな。ところで、なんだその様は？」

「黙れ。何のために来たんだ？」

「皇子を守るのが私達、六精霊の役目だ。」

「ふっ…、そうかい。じゃあ、頼む。シャウト様のためにも。」

ライズは今は倒れているシャウトを見ながら言った。

「承知。『ライズ』様。」

忠誠心

水精霊は紅蓮の剛翼相手に押していた。流石は六精霊である。龍神王の次の次に権力があるだけはある。紅蓮の剛翼が弱いわけではなく、水精霊が強すぎるだけだ。それに相性も悪い。

「もう終わりか？紅蓮の剛翼の名が泣くな。」

「くっ、黙れ。」

「では終焉だ。氷柱。」

水精霊が氷柱と言った途端、先が鋭い氷柱が幾千と現れ、それが紅蓮の剛翼の身体を貫く。

「ぐうあーっ。」

「さあ、もう降参して龍神らしく龍神王様のもとに仕える。」

「龍神王には仕えられない。なぜならな…」

紅蓮の剛翼の身体が変化し始める。そして微笑みながら優しい声で、
「俺はなにがあろうと龍妃様に全てを捧げ、忠誠を誓ったからだ。
その忠誠心は自分自身の身をも犠牲にする。だから…」

水精霊は油断なく構え、相手を見る。

「龍妃様の命令に従う。例えば何が俺を阻もうとも。」

そして紅蓮の剛翼は龍化した。

「やめるんだ。龍神が龍化すると莫大なエネルギーを得られるが体力を物凄く消耗するぞ。」

この戦いの中での唯一の好意的な笑いで答える。

「構わない。我が主がそれを望むならば。」

ウガアオアオー、と、低い唸り声を響かせて、炎を吐く。しかし、水の防御の結界を扱える水精霊には届かなかった。

「無駄だ、紅蓮の剛翼。私に炎は効かない。おまえ程度ならな。」

しかし、炎を吐きつつけて、体力の限界が来て、元の姿に戻りその場に倒れた。悔いのない仕事をしたような笑顔を残して…。

紅蓮の剛翼がかけた精波が解けて、高川は自由に動けるようになった。が、しかし、動けなかった。無惨に倒れた父親と、焼けた有と守野を見て…。

水精霊はシャウトとライズに回復の精波を使い、ライズに話し掛ける。

「仕事はこなした。」

「感謝します。」

「なら…、」

ライズが大声で水精霊の言葉を遮り、敵対する言葉を発する。

「でも…、貴様は許さない。例え何があるうともな。」

「いい加減にしろ。」

シャウトが仲裁にはいる。

「・・・申し訳ありません。」

そしてライズは黙り込んだ。

「水精霊、感謝する。」

「いえ、皇子を守るのは私の仕事ですから。」

「ありがとう。」

「では、これで私は失礼します。」

そう言って、水精霊は異空間から去って行った。

「紅蓮の剛翼、」

倒れている紅蓮の剛翼に向かって、ライズは語りかける。「きっと、きつと、もう一度やり直せますよ。」

「そ…うか…い、でも…、少し休まない…、俺は…、」

「ゆっくり考えろ、紅蓮の剛翼。」

「そうだな…。」

「とりあえず家で休んでもらいます。」

「ああ、」

そう言つて、紅蓮の剛翼はゆつくりと目をつぶった。

一方シャウトは…。

「咲、なにも心配はいらないよ。」

「うん。」

咲の長い直毛が有に絡み付く。

「泣きたい時は泣いていいんだよ。」

そう言つと、咲は有に抱き付いて、泣き叫ぶ。

「お父さんが、お父さんが…、なんで…、」

「俺はいろんな龍神を見てきた。そういう龍神もいるさ。」

「有君だつてボロボロだし、お父さんは、なんでひどい事をするの

…？」

「それは、意志の強さだよ。きっと咲もわかる時がくるよ。」

うん、と、頷きその場に崩れた。

その頃ハスナは、

「ドルドームが発生している。一体何が…？」

もう戦いは終わっている事を知らなかった。

忠誠心（後書き）

ここで整理しておきたいと思います。シャウト：結城有、ハス
ナ：結城叶、ライズ：守野光、と、なっています。

2 紅蓮の誓い

「もう戦いは終わっていたのですか。」

「うん、そういう事。」

ライズが紅蓮の剛翼の世話のために、別の家に行っているので、兄妹二人がこの家に取り残されている。

「なら、もう寝ましようか。」

「そうだね、おやすみ。」

「おやすみなさい。」

二人は深い眠りについたのだった。

「有君、私…龍神の娘としてどうすればいいのかな…。」
家で咲は、一人で考えるが、今日はあまりにもたくさんの事がありすぎて疲れていたもので、眠ってしまった。

その頃、ライズと紅蓮の剛翼は近くにある、予備の家にいた。そして、おもむろにライズは話し掛ける。

「ヒューズ、もう一度考え直せ。龍妃様に忠誠を誓っているのは知っているが、シャウト様を拉致するのは、見当違いではないのか？」

「何故俺の名を知っている？」

驚きを隠せず、単刀直入に聞く。が、

「あの大战の時から知ってますよ。」

答えになっていない答えをやわらかく返す。

「ならば、俺の誓いを知っているのか？」

さらに問い詰める。

「ああ、あれは何年昔の事だろう。」

しかし、また、不確定な返答。それに対して紅蓮の剛翼は、

「おまえに聞いても、なにも答えてくれそうにないな。俺はおまえらに負けたから答えよう。あの大戦…、そう、『龍魔結合の乱』の時だ。俺は、あの時誓った。龍妃様にだ。」

「何をだ？」

龍魔結合の乱とは数十年前に起こった、龍界と魔界の激しい大戦の事だ。

そして、紅蓮の剛翼は昔を語り出した。

「あれは…」

誓いは永遠

今から時は遡る。

この時、魔界が急速に力を付け始めて、龍界をも乗っ取ろうとして、魔界と龍界は激しく対立していた。これが後に、

「龍魔結合の乱」

と言われる、大戦だ。この戦いで、多くの龍神や魔神が死んだ。過去最大級の戦乱であった。

この戦乱までは龍界の王は、龍神王ウォルスではなく、龍神頂フラウだった。

そして、組織は今よりもっと強力だった。

王が、龍神頂フラウ。

宰相が、当時まだ龍神王ではなく、頭革と名乗っていたウォルス。ちなみにウォルスには、龍妃マライアという婚約者がいた。

将軍が、無敵独兵ラファール。

この三人は当時3革と呼ばれ、龍界最強の存在だった。

そして、無敵独兵と同等の地位にいたのが紅蓮の剛翼ヒューズだった。

そして、王家直属の守護精霊が六精霊と呼ばれる炎精霊、水精霊、風精霊、光精霊、闇精霊、虹精霊、の六人だ。

紅蓮の剛翼が金の輝きに向かって昔の状況から話しはじめる。

「そのぐらいの事は、私も知っている。おまえの誓いとやらを聞かせてくれ。」

「そう焦るな、順を追って説明する。」

そう言つて、また紅蓮の剛翼は語り始めた。

紅蓮の剛翼は、かなり強力な魔界軍の参謀である『魔界軍司フラット』を討つ命令を出されて、多数の龍を引き連れて戦地の『龍魔の狭間』へと向かつて行つた。

そこではほぼ毎日龍と悪魔が戦っていた。

しかし、魔神軍の参謀、魔界軍司フラットが出て来て、魔神軍優勢へと戦況は変わった。

それを打破する為に紅蓮の剛翼ヒューズは、龍神頂フラウに実力を信頼され、この地に赴いた。

そして、今着いた。

「おい、そこのおまえ。今戦況はどうなっているのだ？」

ヒューズがそこらにいる龍に話し掛ける。

「今はやや押され気味でございます。」

「指揮をとつてた龍神はどうした？」

「魔界軍司にやられました。」

それを聞いて、ヒューズは少し考え込む。そして言う。

「なら俺がその魔界軍司とやらの相手をしようじゃないか。」

龍魔の狭間の中心部では黒髪長身の青年、魔界軍司フラットが、龍を自慢の精波で殺していた。龍は抵抗するが力の前に成す術もなく、

無惨にも死んでいった。

そこに紅蓮の剛翼が現れた。

紅蓮の剛翼と魔界軍司は互いに睨み合い、しばらくの沈黙が生まれた。その時初めに口を開いたのは、魔界軍司だった。

「何故、龍神の双壁の片腕たる紅蓮の剛翼がこんなところにいるのだ？」

龍神の双壁とは、無敵独兵ラファールと、紅蓮の剛翼ヒューズという、二人の、龍神の力の象徴として崇められた為に付けられた、二人の総称の仮称だ。

「それはおまえを倒すためだ。」

「私に戦いを挑むのか？」

「無論。」

短い会話をしたかと思うと直後に戦いは始まっていた。

ヒューズは得意の紅蓮の火炎で猛撃。対して魔界軍司は回避するだけ。

また今度は紅蓮の火炎が槍を形作り、魔界軍司を突き刺す。

それでも魔界軍司はただひたすらに避けた。

しかし、途中で速度の緩急をつけたヒューズの攻撃をうけて、魔界軍司は弱っていた・・・

「どうした？その程度か、口ほどにもない。」

「そう思うなら、早くとどめをさす事を勧めますよ。」

「防戦一方のくせに、なんかの強がりか？…まあそういうなら、とどめをささせてもらう。」

・・・ように見えただけだった。魔界軍司は回避しながら、火炎に焙られながらも、魔法陣を描いていた。そして、その結界の中に入ったヒューズは、身動きがとれなくなる精波をもろに喰らい、動きを封じられてしまった。

「くそっ、なんて失態。」

「今頃遅いですよ、ではあなたとの会話もこれで最後・・・」

龍妃マライアは、紅蓮の剛翼がきちんと仕事をしているのかの監視に行かされていた。そう、龍神頂によって、だ。

なんでこんな面倒な事をしなきゃいけないの、と言わないだけ龍妃は大人である。

それはさておき龍妃は龍魔の狭間に着いた。

そこには、魔界軍司により、身動きを封じられて、今にもやられそうな紅蓮の剛翼がいた。

龍妃はそれを助けるべくして、いきなり…、そう、要は不意打ちだ。…全力で雷撃を放つ。

それが魔界軍司にもろに当たる。

それに腹をたてた魔界軍司は、ほぼ全力と言っている精波を放つ。

それは、物凄く重い重力波で、人間だったら、たやすく潰す事ができる。

それを放った時、魔法陣への精波の力が弱まっていた。なのでヒューズは封印をかいぐり、なんとか身体の自由を得た。…けどその時、自分を助ける為に、命を落とそうとしている龍妃を見た。

体中が潰されていて、まさに瀕死という形容詞がぴったりだった。

そうさせた相手、魔界軍司を睨み、ヒューズは今までの中で一番強いと思われる紅蓮の火炎を魔界軍司へとぶつけて、世に名を響かせる魔神を一撃のもとに焼き消した。

想像を絶するような温度だろう。

力の大半を使い、消耗きったヒューズは龍妃のもとへと歩み寄った。

「龍妃様、俺の不甲斐なさの為に…、申し訳ありません。」

「別に気にしなくてもいいのよ。私はたいした戦力に、なれないの

だから。」

体中ボロボロになりながらも、龍妃マライアは美しく輝いて見えた。
「もとより、俺は救われてこの世に留まっている命です。その救い主の為には死をも選べます。だから…、」
紅蓮の剛翼は複雑な呪文を唱える。

「ま…、さ…、か…、？」

「俺の命の恩人に命を捧げます。」

そう言つて、自身の体から体力と精神力を、龍妃に分け与え、残つた精神力で回復の精波を使い、完全に傷を直す。

その結果、龍妃は元に戻つたが、ヒューズは残りの力が無くなつていた。

「ヒュー…、ズ…？」

「俺は…、今後回復しても今までのような力は無くなっていると思われます。」

一呼吸をおいて、また話し出す。

「けれど、俺は救われた命をまっとうする為に、そう、あなたの命、それを守り続けます。」

「紅蓮の剛翼っ！？」

何を言つてるの？と、までは、言葉を紡げなかった。

「そしてあなたの指示、命令に従い働いていきます。たとえ今の地位を捨てたとしても。」

「何故あなたはそこまでするの？」

龍妃の当たり前のような質問に答えず、深く礼をした。そして、

「マライア、」

突然叫ぶ。

「あなたは馬鹿だ。」

龍妃は何を言つてるのか理解できない。

ヒューズは声を落ち着かせてから続ける。

「これは、あなたへの忠誠。己へ戒め。そして全世界にも響かせたい、誓いです。そして…、」

あなたへの、そう、既に結婚を決めた、あなたへの、私から注ぐ、最後の愛情です。
とまでは、ヒューズには言えなかった。

その後、龍神軍は魔界に進軍して、この龍魔結合の乱に終止符を打った。

龍神頂の死を犠牲にした勝利によってだ。

金の輝きに話したのはここからの部分だけ。

「この時俺は誓った。何があっても龍妃マライアを守ると。そう、それが俺の、」

誓い。そして、妻と娘には悪いが、今も変わらないおまえへの愛だ。

もちろん妻も娘も愛してるがな、と、自嘲気味に笑って見せた。
金の輝きには見せなかったけれど。

誓いは永遠（後書き）

今回からは人物紹介をしようと思います。

まずはシャ

ウトから。年齢15歳。身長約175。銀色の少し長めのストレートな髪。顔は整っていて、二枚目という形容詞が似合っている。ジャニーズよりも、よっぽどカッコイイかもしれない。戦いにおいては精波よりも剣術で戦う方が得意。性格は明るく、優しく、親しみやすい。

次回はハスナの紹介をしたいと思います。それと、そのうち、いろんな人物を主人公にした

短編を書く予定なので、そちらもよろしく願います。

日常

翌日、ライズは紅蓮の剛翼を見張る為にしばらく学校を休む事に決めた。

「有君、おはよー！」

結城有として、学校に来ているシャウトは、クラスの少数…バスケットの人達…から挨拶を受ける。

「おう、おはよう。」

それを快く返す。

「ところでさ、来月行われる体育祭の予定を今日決めるらしいよ。」
バスケット部の友人たる、井場悠斗が言う。

「ふーん、そうなん」

その時チャイムが鳴り、担任の教師が教室に入ってきた。

「早く席に着け。では出欠をとる。」

といい、名前を読み上げていく。

「今日は守野が休みで、他は…全員来てるな。では早速だが、体育祭の出場種目を決める。みんなで話し合って決めるように。」

その結果、結城有と結城叶、守野光はクラス対抗リレーに出場する事になった。(ついでに井場悠斗も。)

「では、各自種目は決まったので覚えておくように。」

それと同時に授業の終了を告げるチャイムが鳴り響く。

「起立、礼、着席。」

そして授業は終了した。

その後かつたるい授業を終えて部分に向かう。

「リレー頑張ろうな。」

いつもの調子で井場が声をかける。

「そうだな。」

有も軽く答え、数分後、部活の練習が始まった。

家に帰ると、普段クールな妹、ハスナが愚痴をこぼす。

「なんで私がリレーなんかに…。」

「いいじゃないですか。」

ライズは優しく答える。

「よくないです。めんどくさい。」

「理由そんだけかよ。」

シャウトのツツコミを無視し、二人は会話を続行する。

「私も出てみたかったですよ。」

ライズは数秒後、事実を知らされた。

日常（後書き）

ハスナについて紹介。年齢13歳。身長155。赤いストレートな髪を肩までのばしている。顔は童顔で俗に言うロリ系。なのに普段はクールな表情をしている。そして、けっこうしっかりしている。兄よりは。何事も丁寧。ハスナの紹介はこんなところです。

日常2

体育祭に向けて、今日から練習が始まった。リレーの選手は練習が楽なので、ハスナは、リレーの選手になれてうれしいだとか言っていた。昨日までとは明らかに態度が違うのは、クラスのほぼ全員、本人以外は当たり前のように気付いていた。

まあ、それはいいとしてだが、この学校はやたらと練習がつらい。仮病で休んでいるライズが羨ましい限りだ。

シャウトもだが、きつとみんなそう思ってるに違いないだろう。

体育祭は、各学年4クラスあるのでそれを縦割にして、紅団、蒼団、翠団、黒団、の4つの団にわかれる事になっている。龍神御一行が所属している、1年1組は、紅団である。なので、紅いはちまきをつけている。

それにしても、まだ5月なのに、暑い。まあ、それは、みんながみんな頑張っている証拠だということにしよう。シャウトは考える。

だが、一人卑怯なやつがいる。ライズだ。体育祭前日から登校しますだとき。なんてこった。皇子の権限で役割交換したいが、それは止めておこう。なんせ、紅蓮の剛翼の狙いは俺だから。

くだらない考えを巡らしているうちに、今日の練習は終わっていた。

「有、今日の練習つらかったな。」

いきなり話し掛けて来たこいつは、井場だ。

「そうだね。まったくもって同感だよ。」

「でも、リレーは、まだ楽な方じゃん。」

咲が反論する。

「そうかな？」

首を傾げる井場。

「二人三脚はつらそうだったね。」

ハスナが珍しく、優しい口調だ。

「やっぱり叶はわかってくれたよ。」

女達は互いの友情を確かめ合っていた。のか？

部活を終えて、家に帰ると、ライズと紅蓮の剛翼が、待っていた。

「ご苦労様でした。」

なんて言って、迎えてくれる。

ハスナが珍しく愚痴をこぼす。

シャウトがいつもより早く寝る。…撤回、咲からのメールによって、起こされて、結局はいつもと同じ時間。

平和な日々がこれからも続くといい。

シャウトは真剣にそう思っていた。

日常2（後書き）

今回は井場悠斗君が自己紹介したいらしいので、させてあげましよう。俺は井場悠斗。中一のバスケ部だ。黒髪に軽いパーマがかかったような髪型をしている。自慢じゃないけど、女子からカッコイイ、って言われた事もあるぞ。有や守野程じゃないけど。身長は162で、一年にしては、高い方じゃないかな。バスケ部ではレギュラーをとるぜ。（目標）。性格は明るく元気なお調子者、って言われたな。まっ、こんなもんでしょ。

体育祭

体育祭の練習もいよいよ大詰め。準備も忙しい。

何たって、明日は体育祭当日だからな。うん、当たり前だ。

人間界に来てからまだ2ヶ月しか経っていない、人間ビギナーの龍神シャウトは思う。そりゃまあ雰囲気がそうだから誰でもそう思うだろう。現に事実である。

シャウトやハスナ、そして、紅蓮の剛翼はもう見張らなくてもいいと判断して、学校に来ているライズはリレーの選手なので軽く最後のバトンパスの調整にはいつてる。ついでにいうと井場もだったかな。

まあ、そんなわけで、早い一日は、もう半分と少しを終えている。

「有君ー、リレーどう？勝てそう？」

この声はきつと咲のものだろう。

「うん、余裕だよ。そっちの二人三脚は？」

「うーん、少し不安かもね。」

少し焦りを見える答え。

「でも、一緒に走る人と協力して一生懸命やればいいさ。」

咲はその優しさに浸りつつ、返答。

「そうだね、ありがとう。」

満面の笑顔で。

とりあえず、翌日。

気は乗らないが紅蓮の剛翼も見学に来るらしい。

体育祭当日だから、朝は早い。眠そうな妹を見ながら、シャウトは学校に歩を進める。

学校に着くと、みんなが絶対優勝だー、と騒いでいる。そんな簡単に勝てるわけがない。

勝つ可能性もあるが。

体育祭が始まる。俺達紅団は順調に勝っていく。もしかして優勝するかもしれない。

すると、二人三脚がもうすぐ始まるようだ。とりあえず応援する。

「咲頑張つてね。」

何故か顔を赤らめて、恥ずかしそうな様子をしている。

「あのね、」

「どうしたの？具合悪いのか？」

「一緒に走る予定だった人が怪我しちゃって…」

「ん？」

「だから一緒にやろう。」

どうやら、こんな事の為に恥ずかしそうにしているらしい咲を見て、笑うシャウト。だから、からかう。

「御自由にして下さい、お嬢様。」

顔が真っ赤になる咲。人間はおもしろい。

「あ、ありがとう。」

「頑張ろうね。」

「う、うん。」

幸せそうに笑う咲。和むな。

そして二人三脚。

アンカーだったので、しばらく待ってる。

もうそろそろ出番だ。

バトンは最後で渡された。ようするにビリ。

息を合わせて走る。でも咲の足の速さじゃ追いつけない。そこで考

えた。

「勝ちたい？」

「うん。」

「じゃあ勝つよ。」

シャウトはそう言つと、咲を横抱きにして走り出す。龍神だから、もちろん人間界の常識を知らない。

「キヤー、やめてー！」

真っ赤になりながら叫ぶ咲。余計を浴びている。

どんどん追い抜いて行く。最後には一位になってゴール。

「やったね。」

「。」

咲は心臓がバクバクいつて、とても返事できそうになかった。

熱いね、などとはやしたてられるうちに昼食時間となった。

シャウトはハスナ、ライズと一緒に食べる。ライズは料理も上手なので昼食はうまい。

いつものような淡々とした食事をすませて、次はクラス選抜リレーだ。

もちろんシャウトは優勝するつもり。

その時まで。

体育祭（後書き）

番外編、独りの願いを書いてみました。是非読んでください。今回は水精霊を紹介します。年齢20歳。（それ以上歳をとらない。なので、年齢を聞かれたらそう答えるのが決まりらしい。）身長190。ストレートな長い青い髪をしていて、肌はキレイで特に目鼻が整っている。コイツも明らかに美形だ。ムカツクぐらいにな。戦闘ではおもに水に係る精波が得意。性格は忠実に物事を淡々とこなすような性格。でも裏に熱い一面もある。水精霊の説明はこのくらいにしておこう。

気配

突然、龍神の気配がしたのだった。

これは何だ？

ライズもそれに気付いたらしくて辺りを見回している。
どこからだ？

そうしているうちに、リレーの時間になってしまった。気配が気になるけれど、とりあえず今はリレーに集中しなきゃな。

「頑張るぞ、有。」

「言われなくても…」

言いかけて言葉を失う。気配は普通のクラスメートかと思っていた、井場悠斗からした。
何が起った？

「ハハハ、シャウトおもしろい。」

「誰だ!？」

「ん、忘れたの？」

「は!？、誰だ？」

「ひどいなー、では改めて自己紹介します。六精霊の光精霊だよ。」

「え、でも、あんた、井場だよな？」

「意識乗っ取りました。」

…この女なんて事してるんだ。

「それはわかったけど、なんでだ？」

「体育祭、参加してみたかったんだもん。」

「…」

「あー楽しみだな。」

「…」そしてリレー、女子の部が始まった。

紅団はなんとかぎりぎりで一位になったようだ。

「よかったな。井場…、じゃなくて光精霊さん。」

「よかったね。有君。」

はしやぎながら言う。

「なんでそんなはしやいでんのさ？」

「だって楽しいんだもん。」

「…そうか。」

二人とも行くぞ。

というライズの声で順番がきたことに気付き、位置についた。

『位置に着いてよーい』

ドン。

そしてリレーは始まった

最初はライズ。

とりあえずは一位のようだ。

だって周りの女子が騒いでるから。

次は、シャウトだ。

もちろん一位キープ。

次にクラスの野球部の小嶋君。

小嶋君も頑張って一位をぎりぎり死守。

で、最後に井場（光精霊）だ。

それはやりすぎだ。といった感じの爆走。

そして紅団は優勝。

その後、井場はヒーローとなったとき。

気配（後書き）

更新遅くなり申し訳ありませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945b/>

龍の灯火

2011年1月28日04時50分発行